

幕末明治の写真師列伝 第六回 下岡蓮杖 その五

久之助と舟子たちが下田の町へ向かう途中、久之助は旧知の浦賀与力・合原操蔵と出会った。合原は久之助に、下田の町は津波による被害がひどく、その惨状はとても言い尽くせない、早く下田の町に行ってみなさいと、言うや否や足早に立ち去ってしまった。それを聞いて、久之助と舟子たちが下田の町に急いで行くと、合原の言うように下田の町は津波の被害で人家が壊滅的な被害を受けていた。久之助が幼い時の記憶からようやく自分の生家があった場所を探してみると、やはり生家も津波による被害で僅かに敷石の穴が残っているばかりであった。この久之助の生家は、最初、現在の静岡地方裁判所裏の田圃に面した所であったが、後に役所の建築のため立ち退きを命じられ、下田八幡神社の前に移転した所であった。

辺りには最初、一人も人がいなかったが、しばらくするとようやくどこかに避難していた人が、一人、二人と戻ってきた。そのうちの一人に、久之助が自分の家族の行方について知らないかと訊ねると、幸いにも知っている者がいて、自分が津波の被害を避けるために人家の屋根の上にいると、久之助の姉が子供を背負い、婚家の父と母の手を引いて、胸より下の辺りまで水に没しながらも、引潮の時であったので、おそらく助かっているであろう、山の手の方へ行って探してごらん下さいと、話してくれた。おそらく姉たちは下田八幡神社裏の山の線に沿って、大安寺のある高台に避難したのであろう。

そこで、早速、近くの大安寺がある山に行くと、多くの避難者に姉の行方を尋ねると、久之助の肉親、縁者は全員無事でここに避難していることがわかった。久之助は幸いにも肉親、縁者と再会することもでき、その喜びと共にただ嗚咽するばかりであった。

久之助が浦賀を出る際に、角谷金右衛門氏の子息・角谷福次郎より二十両の金を角谷の父に渡してくれるように頼まれていたので、親族との再会を果たした翌日、この角谷の父の所を訪ねて、この金を渡し、改めて角谷の父より三両を借りることにした。江戸の狩野董川と、浦賀

の父・桜田与惣右衛門に、下田の状況などを飛脚を雇って知らせるためである。ところが乾いた紙を入手することができず、仕方がないので、屋根板を拾って、これに手紙を書いて飛脚に託すことにした。江戸の狩野董川に送った板の方には、「逆波（さかなみ）に追はれて家も米もなし楽（たのしみ）もなし死にたうもなし」と一首書いておいたところ、後に董川が自宅で催した歌会で来客者たちに、この書を紹介したところ、来客者の一人、成島司直図書頭が、「日本の和歌は斯くあるべし」と感想を述べたという。

嘉永7年10月14日（1854年12月3日）、ロシア海軍軍人・プチャーチン率いるディアナ号が下田に入港した。報告を受けた幕府では川路聖謨、筒井政憲らを下田へ急遽派遣、プチャーチンとの交渉を行わせた。

しかし、交渉開始直後の安政元年11月4日（1854年12月23日）、安政東海地震が発生した。前述のように下田も大きな被害を受け、ディアナ号も津波により大破してしまい、乗組員にも死傷者が出たため、この交渉は一時中断せざるを得なかった。津波の混乱の中、プチャーチン一行は、波にさらわれた日本人数名を救助し、船医が看護している。この事は幕府関係者にも好印象を与えた。

プチャーチンはディアナ号の修理を幕府に要請し、その交渉の結果、伊豆君沢郡戸田村（へだむら、現沼津市）がその修理地と決定して、ディアナ号の応急修理をするとすぐに戸田港へ向かった。しかしその途中、戸田村から五里ばかりの宮島村付近で、強い風波により座礁浸水し半沈没状態となり、航行不能となった。幸い乗組員は付近の村人の救助もあり無事だったが、ディアナ号の方は漁船数十艘により廻漕されるも、とうとう沈没してしまう。そこでプチャーチン一行は戸田村に滞在し、幕府から小型船の建造許可を得て、ディアナ号にあった他の船の設計図を元に、ロシア人指導の下で、日本の船大工たちの協力により代船の建造が開始された（森重和雄）